芥川龍之介「藪の中」論
――真砂の役割とは――

藤原紀子

はじめに

「藪の中」の先行論文の中でも、登場人物の食い違う証言を元に人間心理を見るテーマにおいては、その結論に作者芥川の真意を探るものが多い。例えば、駒沢喜美（注1）は「作者は真犯人を問題としていない」からこそ、それぞれの証言に「人間のエゴイズム」による「意識的なウソ」を描き、そのため「最も真実を標榜している筈の告白」が、ついには真実を知ることができないものとなることに命題があるとした。また、嶌田明子（注2）は「他の話を統合して一人の人物を固定すべきではなく、それぞれが各々の物語の登場人物であると解すべき」とした上で「それぞれの語りきれぬ思いを補完するように殺人（自殺）という行為」があり、「藪の中」は「自己の心情を他者に語ろうとして語りえず、伝えようとして伝えきれぬところに表出してしまう言葉と行為の在り様」を示しているとした。

この二者の論は、作品論を通して、その結論を芥川の創作意図を探るという作家論に移行させているため、登場人物の証言矛盾に正誤を付けず、その矛盾自体を作者の意図として分析している。「藪の中」の先行論文における他のテーマでは、その証言に正誤を付けるものもあり、そのため、テキストに誤りを定める論文も多い。しかし私はテキストを元に分析を進めていく以上、テキストに対し誤りを定義付けることこそ、矛盾ではないかと考える。私は、先の二者と同じく、芥川の描いたテキストを全て真実として分析を進めていきたい。

その上で先行論文にはない解釈を本稿で進めていくために、管見の限りでは、過去論じられたことのないテーマとして、各段における真砂の役割を分析していきたい。それにより、芥川

が「藪の中」で表した主題を探っていく。

一　「多襄丸の白状」における真砂の報復

これから、多襄丸、真砂、武弘の語る段を章立てした上で、各段における真砂の言動を分析していきたい。まずこの段では、多襄丸が真砂を手ごめにした後、立ち去ろうとした場面を見てみる。真砂は多襄丸に対し「気違ひのやうに縋りつ」き「あなたが死ぬか夫が死ぬか、どちらか一人死んでくれ、二人の男に恥を見せるのは、死ぬよりもつらい」と言う。真砂はまず多襄丸の死を、次いで武弘の死を、最後にその「どちらか一人」の死を望んでいる。だが、後の段にあるように、木に縛られた武弘は女の力でも十分に殺害しうる存在である。真砂は多襄丸を引き止めずとも、自身が武弘を殺しさえすれば「どちらか一人」の死への願いは叶う。しかし、真砂はそうはせず「その内どちらにしろ、生き残つた男につれ添ひたい」と付け加える。だが、真砂はそもそも武弘と連れ添っている。それであるのに、武弘に対し改めて夫婦になることを提案するのは矛盾があり、そこから真砂が「生き残つた男」として想定している男は多襄丸であると考えられる。このことから、真砂の望みは単にどちらかの死ではなく、多襄丸を引き止めた上での武弘の死であると考えられるのではないか。

当初の多襄丸は、一方的に真砂に関心を抱いていた。しかし、手ごめの後には、真砂にも多襄丸の関心が伝わった。その上で、行為後すぐに立ち去ることで、多襄丸の真砂への関心がその場限りであることを示した。それは真砂にどのような思いを抱かせたであろうか。真砂は母親の媼に言わせると「男にも劣らぬ位、勝気の女」であり、多襄丸にも「あの位気性の烈しい女は、一人も見た事がありません」と言われる女である。

ここで、そもそも多襄丸が「気性の烈しい女」と真砂を表す根拠となった真砂の行動を見ると「男は杉の根に縛られてゐる、――女はそれを一目見るなり、何時の間に懐から出してゐたか、きらりと小刀を引き抜きました」というものである。このように真砂の「気性の烈し」さは、危機に瀕しても臆しないというものであった。真砂は手ごめにされた後も、その「気性の烈し」さを発揮し、多襄丸を去らせては、自分が軽んじられていることが明らかになってしまうため、それを防ごうと多襄丸を引き止めたのではないか。それに加えて、真砂が多襄丸に「つれ添ひたい」と言った意味は、多襄丸が去ろうとした原因であるその場限りの関心を、夫婦という永続的な関係への関心に変え、

自分の価値を認めさせようとしたのではないか。

その真砂の言葉の後、多襄丸は「この女を妻にしたいと思ひました」との決意を口にする。それを「唯かう云ふ一事だけ」と表す。それはまるで、一途な恋慕であるかのようであり、多襄丸自身も「卑しい色慾ではありません」と言う。その証明として「もしその時色慾の外に、何も望みがなかつたとすれば、わたしは女を蹴倒しても、きつと逃げてしまつたでせう」と言うのであるが、この発言は、恋慕であることを訴えると同時に、立ち去ろうとした当初の多襄丸が「卑しい色慾」のみの思いであったことを認めているものである。

多襄丸は武弘に対し「殺さない限り、此処は去るまいと覚悟」した上で「卑怯な殺し方」はしたくないと言った。そのため、武弘の縄を解き太刀打ちをし、その経緯を「わたしと二十合斬り結んだものは、天下にあの男一人だけ」「感心だ」と「快活」に笑った。この行動は、当初の多襄丸が「尤もらしい嘘」をつき、武弘を藪の中へと誘い込み「いきなり相手を組み伏せ」「不意を打」った姿や、真砂を「男が急病を起したらしい」と騙し、手ごめにした心理と相反するものである。その違いはまさしく、多襄丸の言った「卑しい色慾ではありません」「妻にしたい」「唯かう云ふ一事」であるという言葉に繋がるのではないか。多襄丸は、色欲のみにとらわれている際は、騙し討ちという手立てを取っていた。しかし、真砂に対し、「妻にしたい」という欲求が生まれてくると、それまでの態度と一変し「卑怯」な行為を恥じるようになっていると考えられるのである。真砂が多襄丸の思いを変化させようとした目的は、この行動の違いによって確かに果たされているといえる。

また、多襄丸は当初真砂を手ごめにしようと考えた色欲のみであったとき「たとひ男は殺しても、女は奪はう」と言う。それは、真砂の発言をもって恋慕に変わった「たとひ神鳴に打ち殺されても、この女を妻にしたい」と似ている。しかし、二つの文には、歴然たる違いがある。それは第一に先の文が他人の死であるのに対し、後の文が多襄丸自身の死を引き換えにしている点、第二に先の「殺しても」という文は能動的であるのに対し、後の「殺されても」という文は受動的である点である。この違いは、まず死の対象が相手から自分に変化している点で、多襄丸にとって重要度が増していると考えられる。次いで、能動から受動への動きの変化を考えるにあたって、多襄丸の真砂への発言を見直していく。多襄丸は真砂を初めて見た際、その顔を「女菩薩」のようだと言う。単に美しさを表すのではなく、「菩薩」と信仰の対象にたとえたことに、多襄丸の真砂に対す

る並々ならぬ関心が窺える。その「菩薩」と「神鳴」とは、同じ聖なるものを含めている点で類似の表現ではないか。カミナリを雷ではなく、「神鳴」と神という言葉を入れて表現したところから、「菩薩」である真砂をさらに「神」にたとえたのではないかと思われる。つまり、多襄丸自身も真砂の意思に操られていることを感じていたからこそ「殺しても」と能動的な相手に向けての思いから「殺されても」と受動的な自分に向けての思いに変化していったのではないかと考えられるのである。

このように、多襄丸は真砂の言葉によって思いを変化させられ、武弘との太刀打ちを決める。ここから、真砂の力でも殺せる状態の武弘を、わざわざ多襄丸を引き止め「どちらか一人死んでくれ」と言うこと、それは、真砂が「どちらか一人」を殺すのではなく、多襄丸と武弘の「どちらか」に「一人」を殺させる必要があったということを意味しているのではないかと考えられる。

そもそも、夫婦と多襄丸が出会った際、多襄丸は道連れになったのは「夫婦」と言っているが、儲け話に心を動かしたのは「男」と言う。藪に入る場面でも「慾に渇いて」いるのは「男」である武弘で、「女」である真砂は「馬も下りずに、待ってゐる」とある。それを多襄丸は「あの藪の茂つてゐるのを見ては、さう云ふのも無理はありますまい」というが、真砂は武弘が急病になったと言われたときは「藪の奥へはひつて来」ている。真砂は必要とあらば、藪にでも入っていくのである。にもかかわらず、儲け話の際は「馬も下りずに、待つて」いたことから、真砂にとって儲け話は必要でないものだったに違いない。だが、武弘が騙されたがゆえに、真砂も多襄丸の手に落ちた。その上に、武弘は真砂が多襄丸の手ごめにあう場面を見ている。自分の欲のせいで妻を手ごめにあわせ、それを縛られていたとはいえ、目の前にいながら助けることさえできない夫に「気性の烈しい」真砂が一方ならない感情を抱かないであろうか。そして真砂は、多襄丸と武弘の戦いの最中姿を消す。それを多襄丸は「太刀打を始めるが早いか、人の助けでも呼ぶ為に、藪をくぐつて逃げたのかも知れない。――わたしはさう考へると、今度はわたしの命ですから（中略）一度は樗の梢に、懸ける首と思つてゐますから、どうか極刑に遇はせて下さい」と言う。つまりこれが、「どちらか一人死んでくれ」という真砂の言葉の結果であるのである。そこからは、憎い武弘と多襄丸とを自分で殺すのではなく、戦わせることによって、単なる死ではなく生き残ったとしても「極刑」の待つ身にしてやろうとした目論みが見える。だからこそ、真砂は太刀打ちの最中に姿を消したの

ではないか。万一にも「生き残つた男につれ添ひたい」という真砂の言葉が真実なのだとしたら、真砂はその場に残って行方を見守らなければおかしい。そこから、真砂の発言は多襄丸と武弘を争わせる方便であり、姿を消すことによって生き残った方に全ての罪を負わせることが目的であったといえる。

このように、真砂は自分を手ごめにした多襄丸とその原因を作った武弘に対し、打ちのめされた状況の中でも、その「気性の烈し」さから瞬時に報復の方法を考え出し、それを実行するために多襄丸を操って武弘と戦わせたと思われる。ここから、多襄丸が語り手である段にもかかわらず、その内容と武弘の死には真砂の影響が及んでいるといえる。

二　「清水寺に来れる女の懺悔」における真砂の愛

今回の段では、真砂が多襄丸に手ごめにされた後から始まるため、前段を引き継ぎ、手ごめにされた原因は武弘にあることを踏まえた上で、真砂がどのような考えで行動したのかを探る。この段で真砂は、手ごめにされてなお「夫はどんなに無念だつたでせう」と第一に武弘を気づかっている。その上、武弘の「体中にかかつた縄目は、一層ひしひしと食ひ入る」様子を見るやいなや「思はず夫の側へ、転ぶやうに走り寄」ろうとした。真砂の行動からは、手ごめにされた自分の身を嘆く様子は見られず、ただ武弘に意識を向けていることが窺える。

そして多襄丸は真砂を手ごめにした後、真砂を見ずに「縛られた夫を眺めながら、嘲るやうに笑」い、武弘のもとに駆け寄ろうとした真砂を「蹴倒し」、一言も発することなく「何処かへ行つて」しまう。この態度は、前段の「もしその時色慾の外に、何も望みがなかつたとすれば、わたしは女を蹴倒しても、きつと逃げてしまつたでせう」という言葉のままの行動である。そこからは、手ごめにし「卑しい色慾」を満たした後は、真砂に関心を持っていない様子が見受けられる。そして真砂はそのような多襄丸に対し、まったく行動を示さない。それどころか「男は咄嗟の間に、わたしを其処へ蹴倒しました。丁度その途端です。わたしは夫の眼の中に、何とも云ひようのない輝きが、宿つているのを覚りました」とあるように、蹴られた後ですら、多襄丸に視線を向けず、武弘を見ているのである。この多襄丸と関わりを持とうとはしていない真砂の態度は、自分に色欲以上の関心を持っていない多襄丸に怒りを感じていないこと、つまり、真砂にとって自尊心よりも気を取られることが、この場にあるということを示していると思われる。

そして武弘は、自分に駆け寄ろうとした真砂に対し「蔑んだ」「冷たい」視線を投げかける。その「蔑」むという行為はまさに、武弘が多襄丸から向けられていた「嘲」りの視線と同じものであり、武弘は自分が多襄丸から受けた行為を、そのまま妻に返していると言える。それを受けて真砂は気を失い、その後目覚め、今一度武弘を見て、武弘の変わらない視線を知ると「恥しさ、悲しさ、腹立たしさ」を感じる。しかし、それでも「夫の側へ近寄」り「あなたと御一しよには居られません」「一思ひに死ぬ覚悟」であると呼びかけ「あなたもお死になすつて下さい。あなたはわたしの恥を御覧になりました。わたしはこの儘あなた一人、お残し申す訳には参りません」と言う。これは、前段の真砂の流れを汲む発言ではないか。ここでの真砂もやはり、自分を手ごめにした多襄丸よりも、それを見ていた武弘に対して恥を感じており、自尊心を保つためには生かしておくわけにはいかないと考えているのである。その発想は、まさしく「気性の烈しい女」だといえる。それは「気性の烈しい女」と多襄丸が評した場面で出てきた小刀を「幸ひ小刀だけは、わたしの足もとに落ちてゐるのです」と言い、用いていることからも表されている。しかし、ここでの真砂は、その「気性の烈しい女」の証明である小刀を「夢うつつの内」に使っている。なぜ、真砂は「気性の烈しい」発言をし、「気性の烈し」さの象徴である小刀を使うという、発言と行動が一致しているはずのこの場面で「夢うつつ」となっているのか。

真砂は、自分の発言に対し「一生懸命に、これだけの事を云ひました」という表現を使う。「一生懸命」と自らを評し、「だけ」と限度を用いることで、かろうじて言い切ったことを示しているところからは、「気性の烈し」さを必死に保とうとする真砂の意思が感じられる。その様子からは、言葉の通りには「烈しい」気性を操りきれていないことを示している。だからこそ「気性の烈しい女」の証明である小刀を「夢うつつ」にしか使えなかったのではないか。それでは、真砂が生来の気性を失ってしまった原因とは何であろうか。

真砂は手ごめにされた後でさえも、自らを嘆く前に「夫はどんなに無念だつたでせう」と夫を気遣う思いを見せていた。これは一見慈悲深い女性に見えるが、その実、女の身でありながら、肌身を汚された我が事よりも、夫の自尊心を思いやる強い意思を感じさせるものである。それはまさに、「気性の烈しい女」である真砂の姿にそぐうものである。辱められた後でありながら、自分を汚した多襄丸の行動を「縛られた夫を眺めながら、嘲るやうに笑」ったと目をそらすことなく観察し、武弘の

「体中にかかつた縄目は、一層ひしひしと食ひ入る」様子に心配する余裕すらあった。その真砂が気を失うほど衝撃を感じたのは、ひとえに武弘の視線が語る「蔑んだ、冷たい光」であった。そもそも、多襄丸が武弘に対し「嘲る」視線を向けていたのは、武弘が欲のため、多襄丸の嘘にまんまとはめられ、妻を奪われてしまったからである。多襄丸には武弘をその視線で見る一片の根拠があったのである。だが、武弘に真砂をその視線で見る根拠があったのであろうか。武弘は自らが招いたこの惨事を悔やみ、詫びるどころか、多襄丸から送られた「蔑」みの視線を、そのまま真砂に返している。それは、真砂が、身を汚された直後にもかかわらず、夫である自分を心配し、駆け寄ろうとしていた最中にそうしたのである。そのことが、どれだけ理不尽なことと真砂の目に映ったであろう。だからこそ真砂は「わたしは男に蹴られたよりも、その眼の色に打たれたやうに、我知らず何か叫んだぎり、とうとう気を失つてしまひました」と言うのである。真砂ははっきりと、武弘の視線が自分に影響を及ぼしたことを表している。それを踏まえて、武弘に小刀を用いる前の真砂を見てみると、真砂は「もう一度夫にかう云ひました」と殺すことを念押ししている。それに武弘は「蔑んだ儘、『殺せ。』と一言云」うのであるが、ただ「殺せ」と答えるのでなく、「蔑んだ儘」とあることから、真砂が延々と武弘に蔑まれ続けていることが強調されている。それを受け、真砂は「殆ど、夢うつつの内に、夫の縹の水干の胸へ、づぶりと小刀を刺し通」すのである。つまり、前に気を失った時と同様、真砂は武弘の「蔑」みに影響を受けていると考えられる。その「夢うつつ」のまま真砂は武弘を殺すのであるが、それは本来の真砂の意思であったのか。そうならば、なぜ真砂は望みどおりに武弘を殺した後、再び「気を失つてしま」うほど衝撃を受けたのであろうか。

　真砂が武弘にかけた言葉は「もうかうなつた上は、あなたと御一しよには居られません。わたしは一思ひに死ぬ覚悟です。しかし、――しかしあなたもお死になすつて下さい」という内容であった。それに対する武弘の返事が「殺せ」という一言である。しかしその言葉は武弘の死のみを示しているのではない。真砂の発言の全てを肯定する言葉である。それはつまり、武弘も、真砂とはもう一緒にいられないこと、真砂の死を望むこと、そして自分を殺させることで、その罪すら、真砂に背負わせることを考えていたということである。真砂は、武弘の返事から、武弘が自分を「蔑」み続けている数々の言葉を感じ取り、その上、武弘を殺すことにより「蔑」みが晴れることなく、永久化されたことを自覚し、その更なる「蔑」みの絶望により「夢う

つつ」からついに再び「気を失つてしま」ったと考えられる。

真砂は目覚めた後「泣き声を呑みながら、死骸の縄を解き捨てました」とある。生きた状態ではなく、遺体から縄を取るという行動は、この段にしか見られない。真砂は、武弘がもう息絶え、痛みを感じることがなくなった後ですら、縛られているのを哀れに感じ、縄を解いたのである。それは「体中にかかつた縄目は、一層ひしひしと食ひ入る」様子の武弘に、思わず駆け寄った当初のままの行動である。真砂は、手ごめに会った直後に武弘の身を案じていたころより、何も変わってはいないのである。このように、武弘をいたわる真砂からは、武弘の死を望んでいる様子は見受けられない。

真砂はその後、死を覚悟していた言葉に反し「死に切る力がなかつた」と死をあきらめたことを告げる。しかし、その状況は真砂にとって喜ばしいものではなく、「大慈大悲の観世音菩薩も、お見放しなすつた」と表す悲しむべき事柄である。また真砂はそう言いながら、その身を「清水寺」におき、「夫を殺したわたしは、盗人の手ごめに遇つたわたしは、一体どうすれば好いのでせう」と言う。自分は菩薩に見放されたとしながらも、寺を選び、内面に苦悩を抱えるということは、生きているにもかかわらず、世俗を捨て、殺してしまった夫と汚された恥に向かい合い続けるということである。

それに加え、多襄丸が初めて真砂を見た際、真砂を「女菩薩」とたとえている。もちろん、真砂がそれを知るすべはないが、数ある神仏の中から、同じ「菩薩」を選んでいることに、深い象徴を感じ取ることができないか。菩薩が真砂を見放したということは、真砂自身が真砂を見放していることを示しているのであり、それは武弘を殺した自分を何より自分が一番疎んじている証拠である。事実、第一に真砂が悔やむのは「盗人の手ごめに遇つたわたし」よりも「夫を殺したわたし」である。ここでも真砂は、女でありながら汚された我が身を顧みない「気性の烈し」さを保ったまま、「夫を殺した」ことを悔やみ続けている。やはり真砂は、恥のために武弘を殺したのではなく、本心では武弘を殺したくなかったと推察できる。であるから、真砂は寺を頼り、仏に祈りをささげられる環境に身を置いたのではないか。つまり、手ごめにあった直後の真砂と同じく、自らが武弘を殺したにもかかわらず、自分よりも武弘を優先に考えているからこそ、菩薩に見放されたと考えている身の上でも、寺に行き、自分のことではなく武弘のことを思って、供養のできる場所を選んでいるということである。

よってこの段にて真砂は、手ごめにあいながらその相手であ

る多襄丸に関心を持たず、常に自分よりも武弘を案じた行動を取っていると考えられる。そこからは、自身を構わない真砂の「気性の烈し」さと共に、武弘に対する真砂の深い愛が窺える。

三　「巫女の口を借りたる死霊の物語」における真砂の存在

この段でも真砂が手ごめにあう経緯は多襄丸の段と同内容であると考えた上で、真砂が武弘に及ぼす動きを探っていきたい。ここでは、多襄丸は真砂を手ごめにした後、「腰を下したまま、いろいろ妻を慰め出」すのだが、これは、先の二つの段にはなかった態度である。そこで、各段における多襄丸が真砂を手ごめにした後の行動を整理していく。

（多襄丸の段）

・女を手に入れる事は出来たのです

・泣き伏した女を後に、藪の外へ逃げようとする

・女は突然わたしの腕へ、気違ひのやうに縋りつきました

・この女を妻にしたいと思ひました

（真砂の段）

・わたしを手ごめにしてしまふ

・わたしを其処へ蹴倒しました

・やつと気がついて見ると、あの紺の水干の男は、もう何処へ行つてゐました

（武弘の段）

・盗人は妻を手ごめにする

・腰を下した儘、いろいろ妻を慰め出した（中略）自分の妻になる気はないか？　自分はいとしいと思へばこそ、大それた真似も働いたのだ

以上のように破傍線部では、手ごめにした後去ろうとした、あるいは去ったという行動が共通しており、波傍線部では、多襄丸が真砂を妻にしたいという心情が共通している。それは、手ごめにした後は興味を失って去る様子と、妻にしたいという永続的な恋慕の情を抱いている様子とが表されているものであり、相反する情であるといえる。先に明らかにしたとおり、多襄丸の段での多襄丸は、前半では色欲、後半では恋慕と感情の移り変わりが見られる。そこから、前半部と共通している真砂の段での多襄丸は、先の分析通り色欲のみの多襄丸であり、後半部と共通している武弘の段での多襄丸は恋慕の情を持つ多襄丸であると推察される。よって、ここでの多襄丸は当初より真砂に恋慕を抱いていたと考えられる。

ここで真砂は多襄丸の口説きに肯定の返事を返し、一時はそのまま去ろうとしたが「あの人を殺して下さい。わたしはあの人が生きてゐては、あなたと一しよにはゐられません」と叫ぶ。その様子は「気が狂つたやう」であり、その仕草は「盗人の腕に縋」りながらである。これも多襄丸の段での真砂の様子、また、真砂の段で真砂が武弘に言った言葉と重なるものである。これらの共通する、武弘に対する死の願いは、武弘が多襄丸に手ごめにされる真砂の「恥」を見たという、真砂の自尊心から発生した感情であるのだが、その役割はそれぞれの段で異なっていた。では、この段ではどのような意味を持つのか。

武弘はこの真砂の言葉を「憎むべき言葉」であり「呪はしい言葉」であると言う。そしてそれは、「盗人さへ色を失つてしまった」とあるように、武弘だけの思いではないのである。多襄丸は真砂を「竹の落葉の上へ、唯一蹴りに蹴倒」し、「あの女はどうするつもりだ？殺すか、それとも助けてやるか？」と武弘に言う。このように、多襄丸も、真砂のこの言葉を不快なものとして捉えている。ここでの多襄丸は、真砂に色欲ではなく恋慕を持っていたはずである。その多襄丸が真砂の段での、真砂に色欲しかなかった多襄丸と同様の「蹴倒」すという行動を取っている。そこから多襄丸の感情が、多襄丸の段とは反対に、恋慕から色欲のみの感情に変わり、しかも手ごめにして終わっている以上、色欲すらなくなり、もはや真砂に関心がなくなったため、その生死を武弘にゆだねていると思われる。では、なぜ先の二段とまったく同じ行動を取った真砂が、この段ではこれほど忌み嫌われているのか。それを調べるために、各段における真砂の言葉を抜き出してみる。

（多襄丸の段）

あなたが死ぬか夫が死ぬか、どちらか一人死んでくれ、二人の男に恥を見せるのは、死ぬよりもつらい（中略）その内どちらにしろ、生き残つた男につれ添ひたい

（真砂の段）

もうかうなつた上は、あなたと御一しよには居られません。わたしは一思ひに死ぬ覚悟です。しかし、――しかしあなたもお死になすつて下さい。あなたはわたしの恥を御覧になりました。

（武弘の段）

「あの人を殺して下さい。わたしはあの人が生きてゐては、あなたと一しよにはゐられません。」（中略）「あの人を殺して下さい。」

ここでの共通概念は点傍線部にあるように、真砂が多襄丸か武

弘かのどちらか男と一緒になる、あるいは、一緒になれないための理由を話しているという点にある。その理由が、二重傍線部に表された多襄丸に手ごめにされた真砂の「恥」への執着である。しかし、その真砂の恥への執着という理由が、武弘の段では記されていないことが分かる。武弘の段での真砂は、ただ武弘の死を願っているだけで、それを願う理由は示していないのである。それであるから、武弘と多襄丸は、真砂が多襄丸に武弘の死を乞うている姿を単なる心変わりの後始末として捉えたのではないか。そのため、武弘は真砂が多襄丸に「では何処へでもつれて行つて下さい」と言ったことを「妻の罪」と言い表したのではないか。男たちには、真砂が手ごめにあったことを恥と感じ、だからこそ多襄丸を選んだという真意が感じ取れなかったのである。それゆえ、多襄丸は武弘に真砂の生死を尋ねることで、武弘の思いを汲もうとする歩み寄りの姿勢を見せ、武弘は多襄丸に「おれはこの言葉だけでも、盗人の罪は赦してやりたい」と気を許しているのではないか。この二人の態度からは、武弘は自らの欲のせいで多襄丸に騙され、真砂を手ごめにあわせてしまったこと、多襄丸は「いとしい」という動機はどうあれ、騙すという行動と手ごめという行為によって真砂を手に入れようとしたことを、まったく罪として念頭に置いていないこと、真砂の気持ちを汲もうとしていないことがわかる。

真砂は武弘の反応を待たず「何か一声叫ぶが早いか、忽ち藪の奥へ走り出」す。それは、不意打ちの真砂の小刀をよけた敏捷性を持つ多襄丸でさえ捉えられなかったすばやさである。しかし、真砂は先の二段において「二人の男に恥を見せるのは、死ぬよりもつらい」「わたしは一思ひに死ぬ覚悟です」と言っていた。このように、真砂は先の二段では、自らの恥に対し、死を覚悟している。そこから、この段でも真砂は手ごめにされた時点で、すでに死を想定していたと考えられる。それであるのに、なぜこれほどまで死から逃れようとするのか。

真砂の段で真砂は、自分に「蔑」みの視線を投げ続ける武弘に対して「恥しさ、悲しさ、腹立たしさ、――その時のわたしの心の中は、何と云へば好いかわかりません（中略）わたしは裂けさうな胸を抑へながら」という思いを掻き立てられた。この思いは、手ごめにあったことに対する思いやりのない武弘への憤りの感情を示していた。ここでも真砂は同じ状況であると察知し、同じ感情を抱いたのではないか。その「何と云へば好いかわか」らない思いがあったからこそ、真砂は立ち去る前「何か一声叫」んだのではないか。真砂が立ち去ったのは死に対する恐怖からではなく、自分をないがしろにする男たちに、自分

の生死がゆだねられている事態が許せないという感情からであったのである。真砂は自分自身で死を選ぶことはできても、男たちに殺されることは許せなかったのである。それはまさしく先の二段に通じる「気性の烈しい女」の姿である。そしてその真砂の「気性の烈し」さを、先の二段で象徴していたのが小刀である。ここから、この段での小刀の役割を見ていく。

武弘はその後、多襄丸によりすべての武器を奪われ去られる。そして自ら死を選ぶが、その際用いたのが、「妻が落した、小刀」であった。それが表していることはそのまま、多襄丸によって自分のすべてを奪われたこと、手ごめにあったことを恥じた真砂の起こした「気性の烈しい」行動が武弘の命を奪う結果となったことではないか。しかも武弘の死には「誰かは見えない手に、そつと胸の小刀を抜いた。同時におれの口の中には、もう一度血潮が溢れて来る。おれはそれぎり永久に、中有の闇へ沈んでしまつた」という文が続く。このように、武弘は自ら死を選びつつも、終止符は別の人間の手によって打たれている。

だが、多襄丸は立ち去る際「太刀や弓矢を取り上げると、一箇所だけおれの縄を切つた。『今度はおれの身の上だ。』――おれは盗人が藪の外へ、姿を隠してしまふ時に、かう呟いたのを覚えてゐる」というように言っている。これは、多襄丸の段で多襄丸が言っていた「今度はわたしの命ですから、太刀や弓矢を奪つたなり、すぐに又もとの山路へ出ました」という言葉と同様のものと考えられる。ここから「身の上」とは「命」であると分かり、多襄丸は自己保身の言葉を呟いて立ち去ったといえる。そして武弘もそれを「呟いた」と言うだけでなく、わざわざ「覚えてゐる」と強調する。その多襄丸が、金品になる「太刀や弓矢」を奪った以上、身の危険を冒して武弘のもとに帰る理由はない上に、武弘の縄を切っていることからも分かるように、そもそも真砂に関心をなくした状態では、多襄丸が武弘を殺す必然自体がない。

しかも、現れた「誰かは見えない手」は小刀を「そつと」抜いたと表されている。その繊細さは女性を思わせる描写ではないか。また、後日武弘の遺体を発見した木樵りの証言には「縄の外にも櫛が一つございました」という言葉がある。縄は武弘の体を縛っていたものであろうが、櫛はここ以外の「藪の中」のテキスト中一度も現れない。それであるのに、遺体発見時に櫛が落ちていたということは、テキストにはない場面で櫛が落ちたということを表しているのではないか。

多襄丸の段では多襄丸は武弘殺害後、真砂を捜し、しばらくあたりをさまよう。真砂の段でも真砂は武弘殺害後、気を失っ

てしまうため、その場に長く留まり、その上に、覚めた後も武弘の遺体から縄を取り除く作業をしている。このように先の二段では、武弘殺害後、殺害した人物が武弘の側で作業をしていた経緯がはっきりと描かれているにもかかわらず、その際に「櫛」の描写は一切ない。唯一武弘の段のみ、武弘の死後、武弘を殺害した当人以外が現れ、その人物が立ち去らないままテキストが終わる。そこからこの文は、武弘の死に別の人物が関わっていることを示すと同時に、ここでテキストには描かれない「櫛」が落とされるのではないかと推測させる効果を持っているといえる。そして、その「櫛」が髪をとかし、飾るものという性質を持っている以上、その持ち主として女性を連想させることは明らかである。このように、武弘自害後現れた人物が多襄丸ではなく、しかも女性の可能性が示されているとなると、連想される人物は真砂しかいないのではないか。そして真砂は多襄丸と違い、逃げ去る前、武弘の死を願っていた。

よってこの段では、武弘の死の原因には、真砂の「気性の烈しい」行動が、死の手段には真砂の「気性の烈し」さを表す小刀が用いられており、その上で、武弘の自害に別の人物を関わらせ、その描写に女性を匂わせることで、武弘にとどめを刺した人物さえも真砂ではないかと連想させていると考えられる。このように、武弘自らが死を選んだかに見えるこの段でも、武弘の死には真砂が深く関わっていることが考察できる。

四　多襄丸が真砂に用いる妻にしたいという言葉

最後に、各段における多襄丸が真砂に言う「妻にしたい」という言葉を比較してみることで、それぞれの手ごめ後における展開の違いが、なぜ起きたのかということを考えていく。

多襄丸の段では、「妻にしたい」という言葉は、色欲を経て、恋慕になった際に出てきた。それは、テキスト内での多襄丸の行動通り、多襄丸の女性に対する関心が、第一に色欲、その次に「妻」という恋慕であることを表していると考えられる。そしてこの段では武弘も、真砂に「死んでくれ」と言われたにもかかわらず、臆せず多襄丸に向かうことで、真砂を嫌うことなく妻にしていたいという思いを示している。ここから、多襄丸と武弘の思いは、同調しているといえる。

また、武弘の段では、手ごめの直後に「妻になる気はないか」という言葉が出てきた。それは、多襄丸の感情というよりも、目の前で妻を手ごめにされるという武弘の衝撃を緩和するために表された言葉であるかに思われる。事実、真砂が心変わりを

したと武弘が感じると同時に、多襄丸も真砂に対し「妻にしたい」という思いをなくしている。ここでも多襄丸の段と同じく、男たちの気持ちは一致しているのである。

そして、真砂の段では「妻にしたい」という言葉は一切出てこない。それは真砂にとって、手ごめという行為は愛情から派生するものでは決してなく、自分を「妻」にと考えている男が、現在の夫の前で手ごめにするなど有り得ないと考えているためではないかと推察できる。そして、多襄丸は手ごめにした後、真砂に関心を持たず去り、武弘も手ごめにされた妻を許さないまま死んでいく。この段でも男たちは行動を同じくしており、それは真砂の考えとも符合している。

そこから考えると、多襄丸の真砂に対しての「妻にしたい」という言葉は、多襄丸の意思ではなく、手ごめにされる真砂という状況を通して、各段の語り手による女性観が表されているといえるのではないか。それは手ごめ後の二人の男の行動をそれぞれの段の女性観と一致させることで、その考えの違いを際立たせる効果をも持っていると思われる。

以上と、今までの分析における真砂の行動とを併せて考えると、真砂は各段の語り手により異なる女性観のため、変化する展開の中、全ての段に対し「気性の烈し」さを形を変えて用いることで、手ごめという逆境に立ち向かったと考えられる。

おわりに

以上をもって、各段における真砂は複数の形で「気性の烈しい」女性として描かれることで、その段の語り手ではなく真砂の影響によって武弘が死に、テキストが進行しているといえた。この新たな読みから、「藪の中」は、真砂を用いて、男の不当さに対し乗り越えていく女性の強さを描くことを主題にした作品といえるのではないかと考える。

注1　駒沢喜美「芥川竜之介『藪の中』」（『国文学解釈と鑑賞』一九六九年四月）

2　嶌田明子「『藪の中』論―語りえぬ思い・その跳躍」（『国文学解釈と鑑賞』二〇〇七年九月）

テキストは、『芥川龍之介全集　第八巻』（岩波書店一九九六年六月）による。

（ふじわら　のりこ／平成一七年度博士前期課程修了　旧姓鵜川）